巻　頭　言

自然に省略がないということ

内　田　俊　一*

数日前のある晴れ上つた日曜の午前に私は中共から昨年末引揚げて来た友人の突然の訪問を受けた．彼を招じ入れてガラス戸の中の陽ざしの暖かい部屋でよもやまの話を始めたが，話は弾んでなかなか止まらなかつた．然し彼が用事を思い出して帰り仕度をする時に「東京もあちらで考えていたよりも立派に復興して近代化しているのには驚きました」といつたので，私は「それは若しかすると上辺だけだという事がわかるかも知れないよ」と云つたのである．

私はこの頃つくづくと自然界のものにはどこにも省略という事がないことに感心する．それは殆ど驚異である．それと共に人間のすることには省略がつきものだという事を悟つて，これまた面白く思うのである．画家は適度に省略を行わねば絵はできない．学問も省略を行つてはじめて学問が成立する場合が多い．それは特定の目標についてだけは省略を行わない為の用意から来るのかも知れないが，自然はそんな事はやらない．例えば人間の体についても，そのいかなる小部分，たとえ顕微鏡的のものを取つて調べてみても，そこには少しの省略もない．若し省略ができておればそれは何かの病変でしかないであろう．どこかに省略のある細胞で組立てられていたとすれば．それは最早人間ではない．だから医者がどんなに専門化しても全体から離れることはできない．人体全体から遊離した専門医は形は直しても人間を殺すかも知れない．

これは石一つ，草の葉一片にも当てはまる．然るに学問はそうではない．自然から抽き出した対象について研究をすゝめるからだ．嘗てウイリアム・ヂエームスはその「心理学」という本の中で

「思想家の多くは，総てのことについて，最終的に唯一つのサイエンスがあり，総てのことが知り尽されて，このサイエンスが完成する迄は何事も一つとして完全には知り得ないと信じている．そのようなサイエンスが若しも実現されるならば，それこそ哲学というべきものである．しかしその実現から程遠い今日，その代用として，我々はこゝかしこで知識の始まりとも云うべきものを幾つも必要に応じて持つに至つた．そして便宜上これらはお互に無関係であるが，漸次発達して真理の一つの体系にまとめらるべき運命にある．このような暫定的な学問を我はサイエンセズと複数で呼ぶのである」

と云つている．

そこで冒頭の新帰朝者との会話に戻るが，東京が如何にその外面的な形態を思いの外に近代化したにせよ，それはその面だけの事であつて，他の面からは大きな変化はないとも云える．これは何も東京のみに限らず，新学制がそうであり，日本の近代産業がそうであり，日本全体がそうであり得るのである．

一昨年フルブライト資金で日本の科学文献を図書館の立場から研究に来たボン君は，一昨年のクリスマスには「Tokyo Letter」というのを書いて友人に配付したが，その時には彼は東洋日本の事物に何から何まで興味を感じ，そして感心した．今年の手紙の中では，しかしその中の矛盾に気がついて警戒をはじめている．日本が案外に浅い所に外面と性質的に調和しないものを蔵していることが彼にわかり始めたのである．

* 東京工業大学学長，工博

わが国の工業技術について明治の始めから開始された技術導入が今以て続いている一方，工業技術研究の必要性が強く叫ばれ，科学教育の振興がこれまた大きく取上げられているのを見ると，恰もわが国の産業技術の発達が後れているのは，科学教育の不徹底と研究活動の貧弱なことがその原因かとも思われるが，それは確かに誤りではないにしても誰も気がつかぬ点に欠陥がある．その欠陥は幾つかの面で工業技術には許されない教育や研究の省略が起つているという事ではないであろうか．

本誌の専門とする鉄鋼工業もずいぶん終戦以後に技術や施設，機械の導入を行つたが，鉄鋼の経済的生産という点からして研究のあらゆる面に省略をなくしなければ，ある面にどんなによい研究ができても結局は目標は達せられないことになる．換言すれば鉄鋼はあらゆる学問と技術とを省略なしに採用して，これをその目的達成に利用しなければならないという事である．極論するならば私は鉄鋼専門のサイエンスがあらゆる学問の内のどこかに位置するというのでは鉄鋼の技術にはならない．そうでなしに鉄鋼の技術には如何なるサイエンスも省略されてないというのでなければいけないと考えるのである．